

第五話

下水という言葉(その一)

柳田国男説との出会い

私は、三年あまり前、偶然、『下水』という言葉の意味を解説した柳田国男先生の文章に出会いました。私は下水道部門に身を置いていますので、長年に亘って『下水』という言葉は常に身近なものでしたが、正直に言ってその意味を柳田国男先生のように考えたことはありませんでした。それだけに先生の文章との出会いは、新鮮なものでした。突然新しい地平が目の前に開けて、驚きの感に打たれ、いささか興奮しました。

先生の文章は、『農民史研究の一部』という本の『忘れてもよい語』という節にありました。私は、文章の内容においてに啓発されましたが、同時にこの節の表現、特に『忘れても』という部分には拘りました。私をも含めこの国土に住むすべての人々が『下水』という言葉の本当の意味を忘れてよ

らこそ、忘れてはならないのです。私は、先生の文章を何度

も読み返しました。その文章とは次のようなものです。

『下水という文字は何時から使い始めたか知らぬが、漢語にその様な意味のないのを見ると、輸入では無くして単にややもっともらしい当て字であった。これに対して上水という語までが、今では当然の如く用いられているが、ゲス井の最初は、(略)ゲスの井即ち溜めであろうと思う。(以下略)』

読み返しているうちに、私はこの説には少し問題があると思いはじめました。それに先生が最初から忘れてよいと思われていたとすれば、この説について最後まで研究しておられないに違いない、こういった思いも私の頭の片隅にしっかりとありました。こういう訳で私はこの文章との出会い以来、柳田国男説をベースにして『下水という言葉』の研究を始めました。この報告は、研究の中間報告です。ともかく今までに分かった範囲の事実と若干の考察を述べたいと思います。

稲場

紀久雄

『ゲス』の意味

柳田国男説は、「下水」という言葉をどういうように考えているかといえますと、「下水」という言葉はもともと、原日本語であって、「ゲス」という言葉と(牛)という言葉に分解できるんだと、こう言っているんですね。

中国から漢字が入って来て、たまたまゲス牛と原日本語で言っている言葉に、漢字で「下水」というように当てはめた。それが下水なんだと。

では(ゲス)というのはどういう意味かというと、肥料なんだというんですね。そして(牛)というのは何を意味するかというと、(牛)というのは例えば川があつて、川の水をせき止めるようなことがありますね。そうすると、そこに何とかいいですか、流れない水があるというような状態が出てきますね。そういうように、(牛)というのは(井)と書いても良いと思いますが、あるものを囲ってそこにどめるというような、とどめてある、存在しているというような、そういうような意味合いなんだというんですね。ですから下水というのは、肥料を溜めてある場所、溜めというのでしょうか、そういうことを意味しているというのが、柳田国男説なんですよ。

これは非常におもしろいなあ、なるほどと思ったわけですが、ただ実は原日本語に(ゲス牛)というものがあつて、今

言ったような意味であれば、(ゲス)というのが肥料だというのがちよつと解せない。もともと縄文時代などは、農業をやっているという状態は、極めて例外的なものではないか。焼き畑みたいなものがあつたとしても、極めて例外的ではないか。

肥料というのを使うようになったのは、そんなに昔のことではなくて、せいぜい数百年のオーダーの話ではないか、そうすると、(ゲス)を肥料と考えるのはいかがなものかというので、(ゲス)というのはもつと別の意味があるに違いないと、常々私はそう思つておつたんです。

ところが最近になりました、神田の本屋を覗きますと、こういう本があつたんです。檜原村の方言を集めた『檜原方言記』という本なんです。これは檜原村で使われている方言を採取しまして、そしてその意味が書いてある本です。実はこれをばつと見ますと、(ゲス)という言葉があつたんですね、この中に。

この本の中に(ゲス)という言葉は、流しの捨て水を意味すると書いてあるんですね。檜原村というのはご存じのように、多摩川の、八王子のもつと奥の方です。実はあそこは東京都下でありながら、ほんとに古い日本の姿が残っていると考えていいようなところなんですよ。

著者の小泉輝三郎という人は、もう九十歳ぐらいのよう



昔の台所と流し

すが、生まれも育ちも檜原の人なんです。この人はもともと検察官なんです。役所を定年でやめまして、そしてその後歩き回って故郷檜原の方言を採集したわけです。

私は、この本の中に(ゲス)という言葉の新しい意味(用例)を発見しまして、これで解決したのかなと思っただけです。だけどこれはまだ一地方だけの事実ですから、檜原だけの話ですから、全国的に(ゲス)という言葉が流しの捨て水を意味しているかどうかというと、これは非常に疑問とするところです。でもそういう意味(用例)があったというのは、非常におもしろい。

ついでに水は何というかというのと、この中には、水は「ウズ」と言うと言っています。何故水を「ウズ」というのかというのは、よくわかりませんが、私の頭にふと「手水場」という言葉が浮びました。ですから「ウズ」というのは水という意味であってもおかしくないなあと、私はそういうふうに思っただけです。この本には水というのは、檜原では「ウズ」というと、こう書いてあります。

じゃあ便器はどういうかというのと、「オカワ」とか「オマル」とか言うらしい。これもなるほどと思わせる面がありませうけれども、ともかく「ウズ」というのはおもしろいなとおもったんですね。

これはもう余計なこと、全然関係ないと思えますけれど

も、縄文式の土器にはしばしば渦の紋がついてますね。だから確かに水のことを渦と言っていたのかもしれないね、縄文時代には。ちらっとそんなふうにも思っただけで、関係ないかもしれませんが。だけどともかく渦の紋がついてますよ。非常におもしろいと思っただけです。

話をもとに戻しまして、(ゲス)というのは、流しの捨て水だとまず考えますと、流しの捨て水を(井)なんです。要するに囲い込んで溜めているわけです。これが下水の本来の意味なんだというふうに考えますと、我々が実は多摩川流域の下水文化調査で古老から聞き取った事実と符合するわけです。つまり昔は排水を溜めて田畑に持って行って撒く。それが本来の下水のあり方だったということなのかもしれないです。

要するに下水というのは、漢字で「下水」と当てはめられたことによって、ものすごく意味が変わったということです。本来の日本語の下水という意味は、先ほど申し上げたような意味であって、それは現在の下水の意味と違うということです。そういうふうに思えるわけがあります。

下水を意味する様々な言葉

昔、特に江戸時代までは「下水」という言葉で表わされる対象を、「ゲスイ」というように呼んでいない例はたくさん

あります。「日本民俗建築語彙」という冊子を見ますと、下水という言葉は、「セセナゲ」と言ったり、「セヒナゲ」と言ったり、「シヒナゲ」と言ったり、「ツボダ」と言ったり、「ナガシ尻」と言ったりしているわけなんです。これは能登地方に伝わるもので、流しの水の排水溜り、土を掘って池のようになっていると。こういうように解説されているのですが、下水文化研究一号の安田実君のペーパーでも、「佐渡島のセセナゲ」というのが載っています。これは「セセナゲ」と言っているわけですね、現に。そして「セセナゲ」の内容は、やはり沈澱槽で、上澄水を排水路へ流す。そしてその排水路は非常に体系的にできているというように、彼は書いていますね。

ですからそのシステムというのは、(ゲス)プラス(キ)という意味にも合っているということだと思っただけです。それから会津地方では、これを「セセナ」と言っているようです。能登地方と会津地方というのは、大分離れていますね。東北と北陸ですけれども。一方は「セセナ」と言っていて、他方は「セセナ」に「ゲ」がついたりしていますから、ちょっと言葉の表現が違いますけれども、まあ全国的に「セセナ」という例もあるんですね。「下水」と言わないで、「セセナゲ」と言うと、「セセラギ」という言葉に非常に近いような感じを受けますね。だから何となく「セセラギ」と「セセナ

ゲ」というのはちょっと感じが似ているのと違うかなと。「セセラギ」と言えば谷川の水が軽く音を立てて流れるといいですか、そういう感じがありますね。

そうすると下水は音楽とも関係があるかもしれません、ひよっとすれば。ともかく非常にいろんな言い方があるということはわかると思いますけれど。

それからそういう一環としまして、「居住習俗語彙」という本によりますと、上にも「ツボダ」というのがありましたけれど、別に「ダ」と訛らないで「ツボタ」とか、「ツブキ」とか「ツボキ」とか、そういう言い方も同じような意味で書いてあります。

あるいは山口県の周防では、「ザウズツボ」という言葉があります。「ザウズツボ」という言葉の中には「ウズ」という部分がありますね。檜原村では水のことを「ウズ」というわけですから、周防地方にあるこの「ザウズツボ」という言葉を、「ザ」という字と「ウズ」という字と「ツボ」という字の三つに分解すると、「ウズ」というのは「水」で、「ザ」は何かというところ、と「雑」というところかもしれない。そうしますと、これは「雑水」ですね。それは何かというところ、台所の流しの溜め、あるいは「ザウズ」というのは牛馬に与える水という意味で、人間が逆に用いられない水と、こういう意味なんだそうです。

あるいは薩摩では「アリダメ」というようにも言っているということがある。

それから三河の幡豆地方では、「ホルメ」というようにも言っています。これは炊事の水を溜めるお堀、肥料を目的とした下水溜というのを「ホルメ」と、こういうように言っておるわけです。

あるいは先ほど周防の話がありました。『周防大島方言集』という本によりますと、あの地方では下水のことを「ドームズ」と言っていた。この「ドーム」というのは、実は雑という意味なんです。ちょっと向こうの方では訛っているんですね。「ザ」という発音がどうもできないみたいなんです。ですからどの言葉を見ましても、雑というところはみな「ドーム」と言っているんですね。「ドームズ」というのは、これは先ほどの「ザウス」という言葉と非常に近いという気がします。そんなことで、そういう言い方もある。

それから『禁忌習俗語彙』という本を見ますと、水のことをアイヌ語では「ワカ」というように書いてあります。単に「ワカ」と言えば通例は雨のこと。「小便をする」というのは、「ウチワカヘダル」と、こういうように言うんだそうです。これも三つの言葉で「ウチ」と「ワカ」と「ヘダル」。「ヘダル」というのは「垂れる」ということで、「ワカ」というのは「水」、「ウチ」というのは「内」という。

だから人間の内なる水を外に垂れるということ、小便をする、こういうことになるわけでしょうけれど、アイヌ語では水のことを「ワカ」というようなんです。

檜原では水のことを「ウズ」という。アイヌ語では「ワカ」という。まあ全然感じが違いますけれども、そんなこともあんなんだというような、ただそれだけのことで紹介しただけなんですけれども。いろんな言い方がともかくただ「下水」ということについても、あったということです。

明治以降の下水という言葉の変化

下水という言葉の意味は、明治以降百年の間に大きく変わりました。明治三十三年にできた旧下水道法ですね。あれはもともと原案は下水法なんです。それに道というのを付け加えて下水道法というのになったにつきましては、水道法が既にできておいて、水道は道というではないか、下水に道がないと寂しいということ、道を入れたというような感じのようなんです。もともと原案では下水法というふうに言っておったんです。日本人は、道という言葉が好きなようです。

この下水道法の中に規定されている物質としての下水には尿尿を含まない。これは渡辺さんのやはり下水文化研究第一号に載っております「厠圍の法制史」、あれに書いてあるとおりです。

ところが昭和三十三年の新下水道法以降の下水には、尿尿を含まないといけないようになっていような気がするんです。昭和四五年の公害国会で下水道法が改正されてからは、完全にそのようになりました。いずれにしても意味、内容は大いに変わったということです。

それから明治の頃の下水というのは、排水路も意味しておったわけです。今もその名残りはありますが、今は下水と言えば厳密には、排水路のことは意味してないわけなんです。

清新な生き生きとした言葉を求めて

時代とともに下水という言葉の意味も変わってきたということ、「まとめ」に入りますが、下水というものにも多様な呼び方があった。一回全国的に下水というものは、どういように呼ばれていたのか、調査してみても、おもしろいのではないか、いつの日か日本全国で昔台所の捨て水とか、あるいはそれを処理する、あるいは処分する施設のことを、一体何と言っていたのかということ調査してみたいと思っています。

それから昔は下水というのは、捨てて流し去るという意味での排水路を意味するのではなかったということです。下水というのは、(ゲス) プラス(井)であるということ、常に処理するという、今流に言えば有効利用するという概念

を、下水という言葉は持っているわけですね。

三番ですけれど下水が狭義の意味で人間に不要な水を意味するようになったのは、せいぜい百年ぐらいのことだなあと、わずか百年ぐらいでそういうふうの意味が変わったんだなあと、こういうふうに思います。

それから四番、「ゲス井」という言葉に、下水という漢字を当てはめたことで、意味の混乱が起こったという柳田説とこののは、私は正しいのではないかなという気がします。

将来のあり方を見つめまして、下水とか下水道という言葉、より清新な、生き生きとした言葉に変えていってもいいのではないか。

でも一方下水という言葉が、縄文時代から原日本語としてあったとすれば、なかなかこれを変えられないのはできないことかもしれません。けれども、わずか百年の間に下水の意味が変わったことも事実なんです。ですからこれから百年ぐらいすれば、また新たな言葉に変わらなとも限らないというふうに思います。

それから最後にこれは藤森さんの郷里の方の、北安曇郡、穂高の方ですね、郷土誌稿という本を見ますと、いろんな里諺といいますが、村の諺があります。例えば「女は流し元、男は便所を綺麗にすれば器量のよい子が生まれる」、「台所を汚しておくど盗賊が這入る」、そんな諺もあるということ

す。こんな諺があるから、逆に流し元なんかは汚かったと言えるかもしれないけれども、まともに受け取ってあげたいなど思うわけです。流し元にしても、台所もきれいにしておいたということが事実だと、正直に受け取ってあげるとすれば、やはり下水という言葉の意味というのは、先ほど言いましたような意味に非常に近い実態があったのではないかなどというような気がする、少し飛躍しているかもしれませんがそういうことです。

以上がとりあえず話題提供として、私が今まで下水という言葉について、気のついたときにちょっと調べた内容です。以上です。

補記

柳田国男説は、以上のように下水を肥料の溜めと考えているわけである。調べてみると、見た目に汚れていなくても、使った後の水は、下水と呼ばれている。そしてそのような水も溜めに入れ、利用されたのである。先生は、肥料を人糞尿に限らず、もっと幅広く考えられていたのであろう。下水が溜めを意味したという考え方は、民俗学的には実証出来る。私は確信する。しかし、限界があるのも事実である。ゲスヤという言葉が大和言葉であり、その意味が柳田国男説と同じだという証拠が無いことである。民俗学的に実証可能なのは、

鎌倉時代あるいはもっと遡ることが出来たとしても平安時代頃までであろう。しかもこの時代以降は、私達が現在一般に知っている意味で下水という言葉が使われている用例を文献上確認出来ると考えて良いようである。柳田国男説の立場からはこの事実をどのように考えれば良いのだろうか。私は、中世以降、下水という言葉にはいろいろな意味が混在していたと考えたい。従って上記の事実があっても柳田先生の考え方は、充分成立する。問題は、古代においてどうであったかということである。民俗学も文献学もこの時代においては有力な手掛かりを何一つ提供していないのである。『下水という言葉』の研究はこの時代に切り込んでいかねば、新しい地平は開けないのである。私は、今その方法論を考えている。適当な機会にその結果を研究報告その二として報告したい。

参考資料

- 下水／下水道という言葉(覚書き)
- (1) 旧下水道法、下水法
 - (2) 汚物掃除法、糞尿と下水
 - (3) 清掃法の誕生と下水(昭和二十九年)
 - (4) 新下水道法(昭和三十三年)以降の下水
 - (5) 四分板下水……玉川上水(例)
- 柳田国男の説

「ゲスキ」とは、「ゲス」と「キ」である。「ゲス」は肥料、「キ」は「溜め」を意味する。古代の原日本語と漢字

『下水という文字は何時から使い始めたか知らぬが、漢語にその様な意味の無いのを見ると、輸入では無くして単にややもつともらしい当て字であった。これに対して上水という語までが、今では当然の如く用いられているが、ゲスキの最初は（略）ゲスのキ即ち溜めであろうと思う。この序でにいふが東京で使うドブといふ語は、本来排水溝という意味を持たず、単に泥深い沼地のことであって、多分は西部日本のタンボと同じものであったと思ふ。即ち大川口の低湿地が、大都會にかわつたばかりに、それがゲスキの兄弟みたやうになつてしまつたのである。』（『農史研究の一部』より。）

(6) 「ゲス」とは？

『檜原方言記』（小泉輝三郎著）

「ゲス」とは、「流しの捨て水」

（参考）水は、「ウズ」。便器は、「オカワ」、「オマル」。

手水（うず）場

(7) 日本民俗建築語彙

セセナゲ、セヒナゲ、シヒナゲ、ツボダ、ナガシ尻

能登地方、流しの水の排水溜まり、土を掘って池のよう

になつてゐる。

セセナ

(8) 会津地方、下水の落ち口、流しの排水の溜まりなど。居住習俗語彙

ツボタ、ツブキ、ツボキ、ザウスツボ

周防、台所の流しだめ、ザウス：牛馬に与える水

（ザ：雑、ウス：水）

アリダメ

薩摩：宅地の不用水の溜め

ホルメ

三河幡豆郡、炊事水を溜める堀、肥料を目的とした下水溜め

溜め

(9) 周防大島方言集（柳田国男編、原安雄著）

ドミズ：雑水、下水（ドミズ：雑）

(10) 禁忌習俗語彙

ワカ：水を意味するアイヌ語、単にワカといへば通例は雨のこと。

ウヂワカヘダル：小便すること。

（ウヂ：内、ワカ：水、ヘダル：垂れる）

(11) 北安曇郡郷土誌稿第4ほう 俗信里諺編

(イ) 便所を綺麗にする人は出世する。

(ロ) 女は流し元、男は便所を綺麗にすれば器量のよい子が生まれる。

(ハ) 水がよければ器量のよい子が生まれる。

（イ）

水がよければ器量のよい子が生まれる。

(二) 台所を汚しておくど盗賊が入る。

討論

川口 学校の先生はしゃべるのが商売ですから。稲場さんのお話を聞いていまして、私も静岡の田舎の生まれですから、田舎のことを思い出して大変面白く思いました。

三つほど申し上げたいと思うのですが、私の田舎というのは、静岡のうちちょっと南の、御前崎と静岡の間ぐらいで、藤枝からちょっと御前崎寄りの方なんです。うちの方は台所なんてそんな結構な言葉は使わないんです。「セド」というんです。ですからさっきの稲場さんのお話を聞きまして、「セセナギ」に「セ」がつくから、ああと思っていたんですよ。とにかく台所なんてそんな綺麗なことは言いません。

ついでに申しますと、昔僕らの子供のときは、プロパンガスもなくて、火力源というのはかまどでした。かまどなんてそういう結構な言葉もなくて、「ヘツツイ」というのですね。いわゆる台所の排水というのはどうなっているかと言いますと、ちゃんとした家ですと、稲場さんさっきお話しになつていたように、やはり(ゲス)(井)なんです。出てきた水を一旦溜めますに溜めるんです。それをあと流末を、ぼくらの家の周りは農村ですから、田んぼに囲まれているんです。田んぼに流さないんですよ。私ら子供のときそうい

う汚い水を田んぼに流すというのは、ものすごく怒られたんですよ。絶対に流さない。今は横着して流しているんですね。その水をどうするかと言うと、肥え桶に汲み込みまして、人力で大体畑に撒くとか、それから汲み取り便所の便槽に入れるんですね。

要するに、汚い言葉を使って申しわけないんですけども、うんこと混ぜるんですよ。貯留しておくんですね。台所の水も風呂場の落とし水も全部一旦ためますにためて、人力で汲み取ったものですね。

そういうようなことを今思い出しまして、いや、子供のときはえらい苦労しちゃったなんて思ってた。懐かしいやらおもしろいやら。

それから便所というのは、僕らの子供のときたしか何と云ったか忘れちゃったけれども、便所なんてそういう結構な言葉はなかったような気がするんですけどね。何て言ったかよく覚えてないんですけどね。国を出てから幾とせて、大分経ったから忘れちゃいましたけれどね。たしか便所とは言わなかったような気がするんですけどね。

渡辺 「手水場」と言いませんでしたか。

川口 「手水場」ということは言いました。

渡辺 「クソヤ」とは言いませんでしたか。

川口 言ったかもしれません。

渡辺 「クソヤ」とか「手水場」というのは、比較的関東、中部地方では言われていました。

川口 「手水場」とは言いましたね。便所とはいわないんですよ。

さっきの稲場さんの話で、もう一つ興味のあることがあるんですよ。私の子供のときは便所を神聖視してましてね。あれは神聖な場所だったらしいんですよ、どうやら。それで例えば、私が子供のときにはしかになりかかったとき、僕のばあさんに便所の前にむしろを敷いて座らせられましたね。お祈りしたことがあるんですよ。便所の前で。田舎の便所というのは、別棟になってましてね。庭の横に便所の建物があるんですよ。その「手水場」の前に座らせられて、お祈りさせられたことがあるんです。

ですからああいう古い時代の人たちにとって、便所というのは神聖だったらしいんだな。何でそんな臭いところに座らせるのか、子供心によくわからなかったんですがね。そういう意識を持ったみたいなんです。

渡辺 稲場さんが話した「流しのお化け」(下水文化研究 第一号所収)に関連して私が話したように、ここに書いてありますね、「オカザリ」。私の田舎では便所に、あんな立派なやつではないんですよ。あれは一番メインの立派なやつなんですけれどね。その簡単な「輪飾り」よりは簡単なやつ

を、便所にも上げるんです。お正月に。

稲場 どんなどころに上げるんですか。

渡辺 田畑は全部上げるんですよ。井戸にも上げます。井戸神様に。

川口 やたら立ち小便すると怒られましたよね。地面に神様がいらっしゃるから、変なところにおしっこをするとかね。

渡辺 今川口先生がおっしゃった「セト」というのは、私の田舎の方では「セド」と言いますけれど。

稲場 川口先生、「セド」と濁りましたよね。

川口 「セド」ですね。

渡辺 私の田舎の方も、やはり台所のことには「セド」と言いました。

稲場 全国的に「セド」と言ったのかなあ。千葉でしょう。先生、便所で祈るのはどんなふうに祈るんですか。

川口 僕とはかく便所の前でむしろに座らせられた。田舎の便所というのは、皆さん都会育ちはご存じないかもしれないけれども、母屋から離れたところにあります。庭は大体東に向いているんですよ。母屋があって、道路がはいって来るんですけどね。庭伝いに母屋の入口の方に歩いて来ると右側にあるんですよ。トイレが。必ず右側(北側)にあるんですよ。どういうわけか。この便所の入口に箆を敷いて、お祈りをしていました。お陰様で以来健康ですけれどね、私は。

西村 あれは東向きに家があるからではないですか。南の方だと日当たりが悪いから。

稲場 で、どういうふうに祈るのですか。

川口 忘れしました。いや、子供なりに奇妙なことをするものだなという記憶はあったんですよ。それで今稲場さんの話で、急に思出したんです。

稲場 でも例えばお母さんなりお父さんなりが一緒でということはないんですか。

川口 僕のお父さんお母さんというのは、大分文化人になっちゃいますね。そういう古いしきたりは知らないんですよ。僕のばあさんの時代なんです。

稲場 おばあさんがだから一緒に。

川口 そのおばあさんというのは、またちょっと離れたところから嫁に来た人なんですけれどね。そっちの地方にあつたんでないでしょうかね。そういう便所に纏わる民俗というのを調べると、大体死にたえたと思うんですけれどね。かなりおもしろいことがあるんじゃないかと思えますよ。大体死に絶えていますよ。もうそういうったものが、早いところ調査しなくてはなくなっちゃいますよ。

谷口 昔の言葉に汚水という言葉はありましたか。

稲場 汚水という言葉はなかったですね。少なくとも。汚水というのは新しいかもしれませぬよ。ひょっとすると汚水

という概念そのものが新しいのかもしれないね。それはどうでしょうかね。

川口 それで一つまたちよいと思いついたんですけれども、これは渡辺さんにもちよっとお伺いしたいなと思うんですけども、昔便所を神聖視したというのは、どうやらし尿を肥料に使っていたでしょう。あれは有価物だったんですね。それでうんこ信仰とか、そういうものは貴重品だということとで、それを溜めておく便所というのを、かなり神聖視したということはあるのかもしれないね。農民の意識の中で、そんな気がするんで、今ちよっと思いつきましてね。

渡辺 やはり肥料に使ったというのは、そんなに古くないんではないでしょうかね。戦国、平安以降ではないでしょうか。

谷口 正式にはつきりするのは鎌倉ですね。

渡辺 そんな古くないはずなんだよね。というのは、大体庶民が便所を持たなかったみたいですね。便所を持ち始めたのはやはり戦国ぐらいではないかと思うんですね。戦国の頃は、便所を持ったというのは、かなり格式のある人だけだったみたいですね。そのために便所のことを、御閑所と言ったところではなかったんですね。一般の庶民はやはり野ぐそでした。空海は高野山で野ぐそだったみたいですから、それ

がやげん型の便所に変わったのは参けい客が多くなって、始末がつかなくなつて、川へ流そうという知恵が出てきた。空海も恐らく野ぐそをやっていたのではないでしょう。あの辺の山でやたらにしていたんでは。汚水という言葉は、比較的新しくないですか。「ゴミ」という言葉は大変古いものらしい。

下水というのは上水に対抗して下水になつたのではないですか。

先ほど稲場さんがおっしゃつたように、道はつかなくつたですね。水道も上水といつた。道がなくて。それは水そのものであり、それからその施設であると。総体だつたようですね。玉川上水と言いますね。

稲場 汚水という概念そのものは、新しい考えのような気がするね。

渡辺 下の水なんて、概念そのものがなかつたのではないですか。どこか自然に。それと水の量は全然違いますから、今と。

稲場 概念そのものがなかつたのかな。そのところがちよつと興味があるんですけれどね。

渡辺 ものはあつたんですからね。ただ人間の方に概念があつたかどうかですね。

川口 ただ渡辺さんね、私は素人だからよくわからないん

ですけれども、日本人は今でもうんこだとかおしっこだとか、こういう公式の席でお話するというのは、よくないことになつているわけでしょう。はしたないことになっていきますね。昔のちゃんとした文章なんかで、そういうことをちゃんと記述したという例は少ないのではないですかね。

渡辺 僕は高野山へ調べに行つたんです、実は。高野山というのは空海が八百何年かに入りまして、一応建物ができたのは、それから二十年ぐらい後らしいんですよ。八百七十年か何か。その頃から霊宝館、お出でになつた方があると思ひますけれども、霊宝館というのは、宝物館ですが、宝物館を兼ねて記録を残してあるんですね。そこでもつて大分調べていただいたんです。僕が行つたのはたつた一日なんですけれど、高野町の下水道課長さんというのが、高野山のお寺の關係の方なんです。この方に便所のことを調べてくれということをお願いできました。たまたまご親戚の方が高野山のお偉いさんでね。えらく一生懸命探してくれたんです。建物の記録がずつとありまして、その建物の中でもいろいろあつて、厨房まではかなり詳しくあります。お勝手もあります。ところがそれを今度流したり、それから便所とか、かわやについては、記録は一切ないんだと、ごく最近まで。

だからやはり今川口先生がおっしゃるように、かなり憚つたではないかと思ふんです。

川口 だから「はばかり」というんですね、きつと。

渡辺 そうなんだ。だから「はばかり」とか「ババ」というんですね。「ババチイ」というのは標準語ですけども、「ネコババ」はそれからきているんですよ。法律用語ですと、人の領有物を不法に占有するなんというんですけれども。

川口 それに、例えば谷崎潤一郎の作品に出ているので、かな。昔はちゃんとしたあいうお殿さまのおひい様、あの人たちが垂れ流したもののというのは、一切庶民に見せなかつたというんですね。深い井戸を掘って、一生使えるだけの穴を掘って、その方が亡くなると土を入れて埋めた。

渡辺 高野山はそうなんです。一番えらい人、管主にあたる人ですね。一番御大はするときはかわやはあつたんでしょうけれども、これはかなり後らしいんですけれども、いつからというのはちょっとわからないんですけれども。水洗便所になったのは、たしかあそこは五十年ぐらい前なんです。

その便所だけは取りつけなかつたんです。水洗便所になつたのは、昭和十一年ぐらいですよ。ですけれどそれだけは取りつけなかつたんです。それはずっといつからかわかりませんが、昔から里の方がわざわざその便所だけは汲みにきていた。ある一軒の格式のある農家の人が。

それはですから今おっしゃるように、庶民の目には触れさせなかつたんだと思うんです。特別な処理をしたのだと思

ます。埋めるか何かして。そういう話です。

川口 昔平安時代の高貴な人のしたものは、きれいな文箱に入れて、ちゃんと紐で縛って持っていた。何か有名な話がありますよね。芥川龍之助の。それから今昔物語にもまたおもしろい話がいっぱいあるんですね。

渡辺 江戸城はそうではないですか。將軍さまだけは猫便所で砂どりだった、横浜の三溪園に砂どりの便所がありますよ。

川口 せっちゃんというのは、雪が隠すのだとかいって、何かこじつきたいわけがありますよね。

西村 いわゆる(ゲス)という言葉がありますね。その(ゲス)のいわゆる漢字はないんですか。どういう字を。肥料のことを指しているというのはどうしてわかつたんですか。

稲場 柳田国男の本によると、肥料と言うと書いてあつたんです。もともと(ゲス)というのは日本語なんです。日本語というのは中国語ではないからという意味で、漢字がないということだろうと思うけれど、ただ、だから肥料という字を当てて、(ゲス)と読ませてもいいかもしれませぬ。言葉なんて約束ごとだとすればの話だけ。

西村 だからいわゆる今の下の水を語源として使っているということが、今現在行われてますよね。その前の言葉がやはりないわけですか。

稲場 だから漢字では当てはめたものはないということだろうと思います。それはちょっとわかりません。ひよっとすると別のものが何かあるかもわかりません。

西村 結局この下の水ということから、すべての現在の混乱が発生したということについては、わかるような気がするんですけどね。

稲場 そうですね。漢字というものは、中国のものでしょう。だからそれを日本語に当てはめたわけでしょう。だから例の万葉集みたいに漢字で書いてあるのでしょうか。ああいうように当てはめて書いているんでしょう、一つ一つ。だからたまたま「下水」と当てはめたんじゃないですか。意味が近かったのかもしれないけれども。

川口 いつかテレビを見ていましたら、柿本人麻呂の『万葉集』の歌というのは、あれは裏の意味があって、うまく韓国の話を隠しているのだというのがありましたね。だから『万葉集』なんていうのは、やはり柿本人麻呂の靈魂を慰めるためにつくったというのでしょうか。柿本人麻呂は韓国の人で、韓国の歌をうまく書いたでしょう。だからそもそもこういう話のルーツというのは、韓国にあるのではないかという気がするんですけどね。

稲場 そうですね。一回韓国の下水も調べてみたいといかないな。

川口 ですから「ウズ」だとか(ゲス)とか(井)とか、もともとルーツは韓国にあるのでは。アイヌ語で水をさっき「ワカ」といったでしょう。あれは昔の「アカ」からきている。ラテン語で水を「アクア」というのでしょうか。あれに近いんですけどね。

それで思い出したんですけども、アイヌ民族というのは、そもそも何かそういう系統の民族だとかなんとかという説もあるでしょう。ですから「ワカ」というのは、あれは「アカ」ですから。

うちの方の田舎でも、半農半漁のところですから、「アカ」といいますよ。「アカ」をかい出すとかね。水をかい出すことをいっているんです。

熊井 船の場合はみな「アカ」と言いますね。

川口 あれは「アクア」と同語源だということですよ。どうも嘘ではないらしいんですけどね。アイヌ語の「ワカ」というのは近いんですけどね。さっき稲場さんが言っていたときに、あらあらと思っていましたけどね。

照井 下水という言葉に、「下の水」という漢字を当てたのはいつごろなんですか。

稲場 それはちょっと今調査中ということなんです。

照井 上水に対する下水となるのではないですか。上水というのは、神田上水とか、玉川上水とかありますね。歴史は

そう古くなく千六百年位ですね。下水は上水に対する言葉として生まれたのでは。

下水という言葉は昔の文献を見てもなかなか出てこないですね。

稲場 よく四分板下水とかいうでしょう。そういうようなのは江戸時代だよな。江戸でも中期以降かもしれないね。江戸の前半とか、初期なんっていうのは、下水といっていたのちよつと僕は自信が持てないね。

谷口 水路については少なくとも、溝という字を当ててますね。それから、後は江戸時代ではこの「溝」と書いて、ドブと読ませたりですね。

熊井 溝という字はすごく不思議で、ある本によると、ちよつと想像もつかない言葉をあてている。そして時代とともに変わっているらしい。

稲場 そうすると、あれですね。要するに熊井先生、時代とともに下水道の側溝、あるいは水路、これも言葉が違ってきているわけですね。平安時代にはある言い方で言っていたけれども、同じ溝でも例えば江戸時代のものと違う言葉を当てて、違う言い方をしていることになるわけですね。

排水路の言葉の変遷なんかでも、そういう変遷があるといふのは、将来表現を変えてもいいということではないか。少なくとも時代とともに変わるといふことの証明になる。

今までそういう証明をやった人はいないですよ。下水道界ではね。下水道という名前を変えたらいいと言った人はたくさんいますけどね。それを証明した人はいないんですよ。過去においてこうだったと。だから変えようと言って、そういう根拠を提供した人はいない。

西村 今川口先生からも話があったが、日本の文化のそもその原点は韓国にあると言う学者がいますよね。日本文化の根源は、やはり韓国にあるという説は正しいものがあるんじゃないですか。

川口 思い出したから話しますが、さっき渡辺さんの高野山のえらい坊さんの話が出ましたけれど、いろんな西洋の伝記を読んだり、日本の偉い人の伝記を読んでいると、その人がどういふふうに、どういうことをしたとか、そういうのは一切書いてないんですね。大体日本なんて古い時代に、そういうのはばかりなんていうのを、まともに調査したことはないんですね。トイレでどういう紙を使ったとか、一日に何回うんこをしたとか、一切書いてない。大体何を食ったかも書いてない。

それでこういうふうな下水文化研究会という、そもそもそういううんこの仕方とか何かをまともにこういうところで研究会をつくって議論するといふ時代になったんですね、現在そこがとってもおもしろいところなんですよ。

つまり文化そのものが、今まで文化という、そういうことを議論しなかったんですね、今まで。今度改めてコーヒーを飲みながら、お菓子を食いがらうんこの話をまともにするようになったんですね。

これを皆さん意外と不思議には思っていないかもしれませんが、長い人類の歴史でそういうことをまともに議論するようになったということは、そもそも文化そのものが変質しているんですね。ですから非常にある意味では奇妙な現象なんですよ、これは。考えてみると。今まで文献学的にそういうことが一切なかったことを、文献をつくって研究しようというのですから、これはものすごく革命的な運動なんですよ、これはある意味では。

稲場 そうですね。だからここへ集まっている人はみんな奇妙な人なんです。

川口 有史以来まともに議論したことがなかったことなんですよ、こういうことは。今そんなことはあたり前だと思っ
ていますけれどね。決してあたり前ではないんですよ。そこ
が実に奇妙というか、不思議というか、世の中が開けたもの
だと。

福田 上水というのを、道という字を入れて、上水を意識
させるようになったのは、いつ頃でしょう。

川口 そういうことを研究したことはありませんけれども、

大体江戸時代は上水でしょう。道はつかなかったんですね。上水道なんて言い出したのは、新しいいではないですか。日本人は道が好きなんです。昔の柔術を柔道に変えたというのは、加納治五郎さんですね。今コーヒーを飲むのだったって、コーヒー道と言うでしょう。道というのが好きなんではないんですか、日本人は。

江戸時代は上水に「道」をつけなかった。日本人の悪い癖は、例えば道路とか、「道」と「路」と同じような意味を重ねているでしょう。河川というのは「河」と「川」で、重なる癖があるんですね。そういう意識があって、「道」というのは勿体らしい言葉だし、上水に「道」を重ねたのではないかと、かねがね思っていたんですね。

それは、江戸時代の人はわりかし素直だから、上水は上水でいいのではないかと思っただけなんです、明治になって人間が大分賢くなって、勿体をつけようというので、上水「道」といったのではないかと思うんですね。

稲場 そうでしょうね。百年ぐらいですね。水道条例ができたのが、あれは明治二十三年ぐらいですか。百年よりちょっと経つんですか。

中村 来年正式の百年祭ですね。

川口 それに思い出しましたけれど、水道条例ができる前に古い法律があって、飲料水注意法というのがあった。あの

ときは上水道と言っていないんだよね。上水と言っているんだ。渡辺 上水というのは、この上ない水ということだと思っ
 んです。最高だということだと思っ
 んです。

それに対して下水というのは、下という字の意味からいくと、これは下というのは最低ということですね。最も低いということ。だから水道はこの上ない水、下水はもうこの下はない水。

稲場 えらいことになってきたな。

川口 それにね、また思いだしましたけれど、昔厚生省にいたある人の説では、明治の、あのとき上水と「上」をつけようと思ったが、ほかに何も水道らしいものがないのだから、「上」は要らないのだと。それで水道になったのだと。戦後になって水道法が改正されましたよね。あのときも本当は下水道、工業用水ができたのだから、上水道といふべきなんだけれども、昔からの伝統で上水道が水道で通っているから、それで現在の水道法は水道法になったんだとその人が言っていましたね。

小野 感想といいますが、思いついたことだけちょっと話させていただけますと、柳田国男説の（ゲス）ですね。「くそ」という言葉はかなり古くからあるんですよ。渡辺茂さんという人の本を見ていたら、「屎戸」というのが書いてありましたね。「屎戸」というのは大きな罪になっているんだそ

うです。いつの時代にそういう約束ごとというのか、縛りの約束ごとみたいなのができたのかわかりませんが、そう書いてあったんですよ。

そうすると「屎戸」がなぜ悪いのかというと、「くそ」を家の中に撒き散らすのが一番大きな罪なんだそうですよ。その時代には。その撒き散らすことが可能なほど「くそ」を溜めておくことが可能な場所というのは、あったんだろうかというような感じをちょっと持ったんですよ。

だからその「くそ」という言葉と、「肥料」という言葉がその時代でもつながるのかどうかというふうなことが、ちょっと感じたんですがね。

それからこの「セセナゲ」の「ナゲ」というのは、「投げ」という言葉とはつながらないのでしょうか。

稲場 そうなっていると、全然逆になっちゃいますね。

小野 そうすると、「セセナ」と下にありますから、その「セセナ」と「ナ」がつながると。それから「ゲス」の「ス」と水道の水の「スイ」ですね。「スイ」と「ゲ」が、何か言葉が離れちゃうでしょう。

中村 この「ス」と「ズ」が水だと思っ
 んです。前の「チヨウズ」とか「ゾウズ」というのが、その前の音が引張ってきているだけで、「ウズ」ではないと思っ
 んです。

稲場 それはそうかもしれないけれど、『檜原方言記』に

よると、「ウズ」と書いてあるんです。だけどそうともとれるね。でも「アカ」とか「ワカ」とか、二字じゃない?。「ズ」だったら一字だから、大分違うような気がするんだ。よくわからない。

小野 言葉の言語学の中に入るようなことは、私には全然わかりませんが、なかなかおもしろい話をいろいろ聞かせていただけたと思うんです。

稲場 言葉ですから、これは約束ごとのことですし、いろんな解釈ができると思うんですよ。だから一回言語学をやっている人に来てもらって、聞いてみてほしいような気がするんですよね、実際のところは。

そんな下水の語源を聞かせてくれと言っても、来てくれる先生がいるかどうかはわかりませんよ。だけでもひよっとすればおもしろいかも。もし聞ければ、そういうのは調べてみたこともないなんていう人も多いかもしれません。

小野 千葉県の『下総の迷信』という本が、図書館に行きましたらありました。それにもやはり便所のがちよっと書いてありました。つまり妊娠をしている女性が、便所をきれいにすると、つまり掃除をすると、きれいな、かわいい、美しい子供が生まれるなんてこと。これは結局いつの時代にできた言葉だかわかりませんが、そういうようなことが下総の言葉の中にもありましたね。

中西 下水というのは、素人考えではやはり上水があって、それに対する下水だったのでないかなと思っただけで、稲場さんが調べられて、こっちの古代の方からきているのかなと、興味深いところがありました。

稲場 多摩川なんかでも、ずっと奥多摩の方なんかへ行きなると、下水というものをただ流すようなところというのは、そんなに多くないんです。みんな溜めに入れて、それを利用するとか、そういうところばかりと言ってもいいような状態ですね、実際には。

だから僕は、下水というのが、現代の意味とは全然違うというように言ってもいいような感じはしました。ともかく昔は、下水というものは、外に出なかったんです。自分たちの周辺から外には、いわゆる今で言う下水というものは出なかった。

中西 上水の方もいつから上水と、玉川上水とか神田上水と使われたのか、それとももっと前から使われていたのか。水道で言えば、水が通るから水の道でしようけれども、海峡の狭いところがありますね、紀伊水道とかね。あれもいつ頃から水道と言ったのか。同じ水の道ですけれどね。

稲場 水道というのもどういったのか。それもちよっと時代的に整理してみてもおもしろいと思うんですが、中西さんはそのあたりやってくれませんか。

中西 わが社で『水道公論』を出していますけれど、下水道のことは書いてないのかという人もいますよ。やはり水道というのは、水道だけと見る人もいますね。と言って、上下水道公論、これもまた長たらしいですけれどね。だから水道というのは、つまり普通は飲み水の水道という考えて使っていますけれども、上下水も含めた水道ということも、一方ではあるんじゃないかと思えます。

稲場 そういう例もあるでしょうけれどね。

村上 感想ですが、今聞かせてもらって、一つの言葉でもいろいろ意味・内容があるので、これはかなりバックグラウンドがないと、とても話を聞いていてもわからないなと思うのが一つと、やはりその時代時代の、どういう時代にこういうふうな言葉が使われたかという、そういう歴史的な、先ほどあった高野山の話でも、今とは随分違うだろうし、どういうイメージで受取れたらいいのかというあたりも、随分基本がないと聞いていて、単に聞いただけになるんじゃないかと思うので、その辺を含めていろいろ話が聞けたらもっと楽しいだらうなと思えます。

稲場 村上さんは京都の公方の生活などに非常に明るい方でございます、適当な機会にそういう話を聞けるのではないかなと思います。先ほどの一生のものを穴に埋めるということなんか、村上さんだったらひょっとすれば本当かどうか、

詳しく知っておられるのではないか。話していただく機会が
楽しみです。

それでは以上で、この話題を終わらせていただきます。

（昭和六三年七月二日）